

平成 30 年度

埼玉医科大学大学院医学研究科
修士課程

学生募集要項

<一般選抜>

<社会人選抜>

目 次

○埼玉医科大学大学院医学研究科概要	1
○医学研究科募集要項	11

埼玉医科大学大学院医学研究科医科学専攻概要

1. 教育目標

埼玉医科大学大学院医学研究科医科学専攻は、医学に係わる様々な分野において、幅広く深い学識の涵養を図るとともに、生命の尊厳に関する高い倫理観を持ち、学際的分野へも対応可能な専門的研究能力ならびに高い専門性が求められる職業等に必要な卓越した能力を培うことを目標とします。

2. 修業年限・学位

修業年限：2年 学位：修士（医科学）

（長期履修生制度を希望する場合には、修業年限は2年を超えることができます。）

3. 各分野の人材育成目標

(1) 生体機能科学分野

医療系分野や、医学以外の専門分野の卒業者に、生体機能関連の医科学を教育し、医学・医療関連の多様な分野で活躍できる研究者や専門職業人となる人材を育成します。

(2) 生体医工学分野

医療系や工学系分野の卒業者に、医用工学および生体工学の学習を付加することで、学際的な領域にも対応可能な研究者や高度な専門職者を育成します。

(3) 理学療法学分野

理学療法士の資格を持つ者に、専門科目に関する深い知識と技術を修得させることで、研究的な視野を常に欠かさない高度専門職業人を育成します。

4. 分野、授業科目

共 通 科 目	
医療政策学概論 生命倫理学概論 遺伝カウンセリング学概論 行動科学概論 細胞生物学概論 医療安全管理学概論 病理学概論 生体機能形態学概論 リハビリテーション医療学概論 実験動物学概論 実用実験医学特別講義 統計情報解析特論 疫学方法特論 最新医学特別講義	
分 野	専 門 科 目
生体機能科学 分野	ゲノム医学特論 生体・病態医科学特論 生体機能科学特論 食品機能学特論 環境衛生科学特論 環境微生物学特論 脳科学特論 分析医科学特論 臨床検査医学特論 生体分子機能医科学演習 生体分子機能医科学特別研究
生体医工学 分野	医療安全工学特論 生体機能代行工学特論 生体システム工学特論 生体信号処理特論 生体情報計測特論 人間工学特論 レーザー医工学特論 光応用計測特論 生体医工学演習 生体医工学特別研究
理学療法学 分野	理学療法研究方法論 人体機能形態学特論Ⅰ 人体機能形態学特論Ⅱ 徒手理学療法学特論 がん理学療法学特論 内部障害理学療法学特論 筋骨格理学療法学特論Ⅰ(上肢・脊椎) 筋骨格理学療法学特論Ⅱ(下肢) 神経理学療法学特論Ⅰ(治療計画) 神経理学療法学特論Ⅱ(手技) 理学療法学演習 理学療法学特別研究

5. 指導教員の研究分野

分野	指導教員	研究分野
生体機能科学分野	鈴木 正彦	呼吸及び循環は生命維持に必須の機能であり、生体は緻密な調節を行っています。その調節系の異常によって現れる疾患は多く知られていますが、その中で睡眠時無呼吸症候群は睡眠時に呼吸が停止する疾患で、有病率が高く、各種生活習慣病との関連が指摘されています。私たちは、現在、この症候群のモデル動物を使用して、呼吸循環調節、認知機能の変化を電気生理学的、行動学および分子生物学的手法により研究しています。
	村田 栄子	小腸の陰窩には、パネート細胞とよばれる亜鉛を多量に含む細胞が存在しています。パネート細胞は抗菌物質である defensin を分泌し、腸管における自然免疫に重要な役割を担っているとともに、小腸上皮幹細胞 (crypt base columnar 細胞) のニッチを構成しているのではないかとされています。パネート細胞の形態・機能を電子顕微鏡、免疫組織化学的手法を用い解析しながら、パネート細胞から分泌される抗菌物質と亜鉛の関係、さらにクローン病などの疾病との関係について研究しています。
	佐藤 正夫	糞線虫症は、消化管寄生蠕虫である糞線虫によりひきおこされますが、今日なおわが国において沖縄地域や西南諸島に感染者が多く存在しています。また糞線虫症は、いわゆる日和見感染症の特徴を持ち、白血病や癌治療などによる宿主の免疫低下により、重篤な合併症をきたし死亡にいたる場合もある疾患でもあります。この糞線虫症に対する宿主応答の解析を、モデル動物なども使って免疫学および分子生物学的に研究しています。
	茅野 秀一	骨髄を首座とする多様な疾患を対象に臨床病理学的、分子病理学的な検討を行っています。主な対象疾患は骨髄異形成症候群、慢性 B 細胞性白血病です。最近では骨髄異形成症候群や悪性リンパ腫に伴う高度な赤芽球増殖に興味を持ち、骨髄中の赤芽球分布についての観察手法の開発に取り組んでいます。主な研究手法は conventional な組織学的手法、免疫組織化学、FISH 法、PCR 法などですが共焦点レーザー顕微鏡を利用した 3 次元観察にも取り組んでいます。骨髄以外にも、大学院生が独自に興味を持っているテーマの「持ち込み」があればそれも歓迎し、適切に指導する予定です。
	野寺 誠	亜鉛は 100 種類以上の酵素活性の活性中心として存在しており、また生体防御機構にも重要な役割を担っている微量元素です。しかしながら、食生活をはじめとする生活様式の変化に起因して、現代人の多くが亜鉛欠乏もしくは亜鉛欠乏状態にあることが指摘されています。こうした観点から、実験動物による亜鉛欠乏モデルを作製して、亜鉛欠乏時に生じる様々な病態変化を臨床化学的および免疫組織学、病理組織学的手法を用いて解明することを目的とした研究を行っています。

分野	指導教員	研究分野
生体機能科学分野	伴場 裕巳	<p>炎症と癌化に関わる研究を行なっています。正常な細胞が何をきっかけに癌細胞になってしまうのか？この命題に対して炎症に関わるプロスタグランジンに焦点を当てて取り組んでいます。最近では、栄養素が細胞機能を直接制御しうる生体機能調節因子であることに注目し、プロスタグランジンと栄養シグナルの観点から癌細胞の代謝について培養細胞を用いて分子生物学的に検討しています。</p>
	奥田 晶彦	<p>ES細胞は、神経、筋肉、肝臓等、体を構成するあらゆる種類への細胞へと分化することができます。また、iPS細胞は、特定の転写因子の導入により、皮膚細胞などの分化細胞を、ES細胞と同等の細胞へと人工的に変換された細胞です。私たちは、このような、ES細胞が持つ特筆すべき性質と、iPS細胞樹立における分子メカニズムを明らかにし、それらの研究から得られた知見をES・iPS細胞の安全性を高めることに応用することで、これらの細胞を用いた再生医療の実現に貢献したと考えています。</p>
	片桐 岳信	<p>私達は、骨・軟骨・骨格筋など運動器の制御機構を分子レベルで解明し、それを疾患の治療や予防、診断等に应用することを目指しています。特に、骨格筋の中に骨が形成される進行性骨化性線維異形成症（FOP）と呼ばれる疾患は、厚生労働省の難病の1つでもあり、私達が発病原因の解析や治療法の確立に精力的に取り組んでいる疾患です。培養細胞や遺伝子改変マウスなどを用いて、生化学、分子生物学、組織学などさまざまな手法を駆使して運動器の仕組みを明らかにし、その研究成果を社会に還元することを目指しています。</p>
	黒川 理樹	<p>私達の研究室では、脂肪肉腫融合遺伝子 TLS (Translocated in Liposarcoma) /FUS の生化学・分子生物学的研究を進めています。526個のアミノ酸からなる TLS の 521 番目アルギニンがグリシンに変異した突然変異体が、家族性の筋萎縮側索硬化症 (ALS) 患者に見出されています。ALS は中年期に発症する神経変性疾患で多くの患者さんは呼吸不全で数年以内に亡くなる難病で根治療法はありません。私たちは、これらのわずかな変異が重篤な症状を起こすメカニズムを調べ、治療法開発の基礎研究を進めています。また、TLS 機能と非コード RNA との関連も研究しております。</p>
	三谷 幸之介	<p>遺伝子治療部門では、安全で効率の高い遺伝子発現技術の開発を進めています。その中でも特に、遺伝病患者から iPS 細胞を樹立して、さらにその細胞で病気の原因となる遺伝子を正常に直す技術を開発しました。この方法では組換えウイルスを用いますが、iPS 細胞以外の細胞でも適用可能であるため、治療以外の様々な目的で、ヒトやマウスの幹細胞を染色体レベルで正確に操作する技術としての応用研究にも、取り組んでいます。</p>
	堀江 公仁子	<p>私達の研究室では、核内受容体や転写因子によるゲノム転写制御機構を主眼として、乳癌・前立腺がんなどのホルモン依存性がん、骨粗鬆症、神経変性疾患、肥満症などの内分泌疾患および加齢性疾患に関する次世代シーケンサー解析などの最新ゲノムテクノロジーを用いた実験法により、病態解明と疾患に対する新規分子標的の探索に力を注いでいます。</p>

分野	指導教員	研究分野
生体機能科学分野	池田 和博	全ゲノム情報を駆使し、遺伝子の機能とその制御を統合的に理解することを目的に研究を進めている。特に、ステロイドをはじめとする内分泌ホルモンの作用メカニズムを分子レベルで明らかにすることにより、内分泌ホルモンが密接に関わる疾患・がんにおける新しい治療分子標的の開発に発展させたいと考えている。また、ミトコンドリアにおけるエネルギー代謝制御の疾患・がんにおける役割の解明を目指している。
	西本 正純	胚性幹細胞（ES 細胞）および、その問題点を解決すべく生み出された iPS 細胞は、あらゆる組織・細胞に分化する能力を持ち、将来再生医療において有用な材料となりうる。しかし ES、iPS 細胞は、腫瘍性も持ち、再生医療に用いる上で障害となっている。そこで私は、この腫瘍性がいかなる分子機構で維持されているかを解明すべく研究を行っている。この点が解明されれば、将来 ES 細胞、iPS 細胞を用いた再生医療がより安全になると期待している。
	池田 正明	<p>生理学・神経科学グループでは、遺伝子改変動物、疾患モデル、細胞系などを用いた下記のテーマの研究を行なっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 時計遺伝子の概日リズム形成における機能解析と時計遺伝子の疾患（精神神経、代謝、癌など）との関連に関する研究 ② 時計遺伝子 Bmal1 の多面的（代謝、増殖、神経発生などにおける）機能の解析 ③ 神経・筋疾患（眼咽頭筋筋ジストロフィーOPMD 等）モデルの作成と病態解析 ④ 発癌モデルの作成と発癌メカニズムの解明 ⑤ 継時的マルチカラー発光記録システムによる転写調節機構の解析
	永島 雅文	主な研究分野は臨床解剖学と神経科学である。臨床解剖学では肉眼解剖学の知見を臨床医学に応用することを目標として、脳神経外科学、整形外科、放射線診断学など、複数の領域と共同研究を進めている。一例として、間接軟骨の可視化を目標として、微分干渉の原理を応用した X 線診断技術の開発を進めている。神経科学では中枢神経伝導路の形態形成を大きなテーマとして、軸索成長円錐の行動解析、側枝発芽の分枝機構などを調べている。
	渡辺 修一	外界から網膜に結像した光は輪郭の強調、色の区別、動きの検出等の特徴抽出作用を受けて脳で認識される。これらの視覚情報処理の第一段階は、網膜内神経細胞ネットワーク内の興奮性・抑制性シナプスで、イオンチャネルや受容体によって行われている。私たちはこれらのメカニズムの解明を、双極細胞やアマクリン細胞に対してパッチクランプ法等の電気生理学的手法、免疫組織化学的手法、分子生物学的手法を適用して進めている。（感覚・神経・行動 生理学）

分野	指導教員	研究分野
生体機能科学分野	村越 隆之	<p>生化学では、中枢神経系と末梢両者における「物質・エネルギー・情報の遷移」という視点から恒常性維持機構の生理と病態解明を目指していますが、具体的には以下のような課題に取り組んでいます。</p> <p>① ストレス応答時の大脳辺縁系のリモデリング機構 ② 細胞膜上分子の分子間相互作用の解析 ③ 自然免疫受容体 TLR の活性化機構の生化学・分子生物学的解明 ④ 腫瘍細胞特異的に発現するマーカー分子の網羅的解析 ⑤ 消化管が繰り広げる代謝制御</p>
	丸山 敬	<p>薬理学教室では各員が独自のテーマで研究を行っています。現在のテーマは以下ですが、薬理学関連の新規テーマにも可能な範囲で対応します。</p> <p>① アルツハイマー病アミロイド/タングル仮説に基づいた病態解明と治療薬候補のスクリーニング ② 脳の神経変性におけるプロスタグランジンの防護的および傷害的作用の解明 ③ 脂質系シグナル伝達に基づくメタボリック症候群の解明 ④ 線虫をモデルとした創薬研究 ⑤ 医学系課程における薬理学教科書および薬理学実習を含めた教育の改革</p>
	佐々木 惇	<p>病理学では、神経病理学の研究を行っており、2つの大きなテーマ、①脳腫瘍の臨床病理学的研究、と②ミクログリアの細胞分子病理学的研究を行っています。①に関しては、1)膠芽腫内の微小血管増殖と腫瘍随伴マクロファージの関連、②上衣腫の分子病理学的研究（多施設共同研究）、③膠芽腫長期生存例の病理学的特徴（多施設共同研究）が現在の主たる研究内容です。2)に関しましては、1)ミクログリアにおける DAP12 蛋白発現と DAP12 遺伝子発現の解析を行っています。</p>
	安田 政実	<p>埼玉医科大学に着任以来、「治療の個別化を視野にいた、卵巣腫瘍における低酸素関連因子の解析」および「治療の観点からみた卵巣癌の特徴付け：低酸素関連因子の発現に基づいた治療の個別化」をテーマに、とくに明細胞腺癌を対象に研究に従事してきた。明細胞腺癌では他の組織型に比して HIF-1α の核内発現が優勢に観察され、組織型によって低酸素環境に対応するメカニズムが異なっていることが示唆された。今後さらに卵巣癌・腫瘍特性の解明において、低酸素関連分子を基軸に抗腫瘍効果が期待される分子の発現・抑制の機序と、治療標的の可能性に力点を置いた戦略へと展開していく。</p>
	田丸 淳一	<p>リンパ節疾患の病理形態、特に 悪性リンパ腫について。 免疫グロブリン遺伝子体細胞突然変異による B 細胞性リンパ腫の正常対応細胞の同定。 Hodgkin リンパ腫の病態解明。</p>

分野	指導教員	研究分野
生体機能科学分野	東 守洋	<p>悪性リンパ腫の分子病態の解明 を目的として下記のプロジェクトを行っている。</p> <p>① 悪性リンパ腫における NF-κB signal の役割。ホジキンリンパ腫において NF-κB いか なる挙動を示すか、生きた細胞を用いたタイムラプス観察を行ない細胞内の NF-κB と の挙動と NF-κB により調節される分子の発現を解析している。</p> <p>② LR11 発現と機能。LDL 受容体 LR11 がリッキシマブの作用に影響を与える分子メカニズムおよび臨床病理学的関連を解析している。</p>
	百瀬 修二	<p>RNA ヘリカーゼのリンパ腫における役割</p> <p>B 細胞性リンパ腫の遺伝子変異と分子病態</p>
	松井 政則	<p>がんに対する細胞性免疫反応の研究を行っています。現在のテーマは下記のとおりです。</p> <p>① バイオナノ粒子を用いた次世代がんワクチンの研究</p> <p>② 新規免疫チェックポイント分子によるがん特異的 T 細胞の抑制機構に関する研究</p> <p>③ T 細胞への抗原提示を決定する新規分子シャペロンの研究</p>
生体医工学分野	池淵 研二	<p>私たちは診断に用いられる臨床検査の改良、新規検査の開発、遺伝子検査の応用などに取り組んでいます。現在テーマとして掲げている項目を列挙しますが、大学院生が独自に興味を持つテーマがあれば持ち込みも歓迎し適切に指導する予定です。</p> <p>① 感染症の原因菌および耐性菌の遺伝子検査</p> <p>② 末梢血幹細胞採取タイミング予想とマーカー</p> <p>③ 輸血用血液製剤の品質検査</p> <p>④ 貯蔵亜鉛量測定系の開発</p>
	小林 直樹	<p>生体信号処理の研究および医用画像処理の研究。生体情報を用いて、映像酔いなどの映像による生体影響を定量化に関する研究を行っている。また、医用画像処理としては、病理画像などからの画像診断に関わる認識処理および画像の圧縮についての研究を行っている。</p>
	加納 隆	<p>私どもの研究室では、病院内で使用される医療機器の広い意味での安全についての研究を行っています。最近では、病院内の医療電磁環境管理(携帯電話等の無線通信機器から発射される電波による医療機器への影響の問題など)ならびに、医療機器・患者の安全管理システム(RFID 電子タグを使用した機器のロケーション管理や患者の見守りシステムなど)に関する研究開発に力を注いでいます。その他、循環器関連もしくは血液浄化関連の医療機器に関する研究など、幅広い臨床工学関連テーマ研究も受け入れることが可能です。</p>

分野	指導教員	研究分野
生体医工学分野	下岡 聡行	研究室では、光や電磁界などの物理刺激による免疫機能調節に関して研究している。在学生の研究テーマは「レーザー光照射による担癌マウスの抗腫瘍効果について」である。レーザー光を従来のように腫瘍部に直接照射するのではなく、非腫瘍部に照射して宿主の免疫力を高めることで抗腫瘍効果を得ることを目的としている。波長の異なるいくつかのレーザー光で照射を行ったところ、ある程度の抗腫瘍効果が見いだされており、現在はそのメカニズムの解明を目指している。
	戸井田 昌宏	物理学とエレクトロニクス技術に基礎をおいた生体計測に関する研究。特に生体計測にとってさまざまな悪影響をもたらす散乱現象に妨害されることなく、目的信号を抽出検出可能な、各種コヒーレント検出技術およびイメージング技術の研究を行っている。またこれら技術に基づく生体機能と形態の非侵襲計測法の研究を行っている。
	宮本 裕一	<p>① 低侵襲光療法に関する基礎研究</p> <p>癌の光線力学的治療（PDT：Photodynamic Therapy）は、低出力レーザー治療（LLLT：Low-Level Laser Therapy）と並び、低侵襲光療法の代表的なものであるが、我々は特に励起レーザー光源の照射形態、パワー密度および総照射量が、PDTの細胞傷害効果や細胞膜の透過性に対して、どのように影響するのかを評価している。またPDTの癌治療以外への応用の可能性やLLLTの細胞レベルでのメカニズムも併せて検討している。</p> <p>② 医療機器の承認審査制度に関する調査研究</p> <p>我が国における審査関連業務の現状調査を行い、承認審査をより科学的かつ合理的・効率的に実施するために必要な規制の方策を提言する。</p>
	若山 俊隆	医科学分野にオプトメカトロニクス技術（光学、機械工学そして電気電子工学を融合させた技術）を取り込み、新たな医療機器や手術支援システムおよびセンシング技術の研究開発に取り組んでいる。その一例として、人工関節置換術や放射線治療装置用の三次元誘導システムや義肢ソケット適合性の3次元評価、分光バイオプシー内視鏡の開発を進めている。
	加藤 綾子	計測制御、画像・信号処理、シミュレーション解析などの電子工学技術や人工知能などの計算機科学技術を生体医工学分野に応用した新しい診断・治療支援機器開発に関する研究を行っている。具体的には、画像解析による生体情報計測に関する研究、瞳孔計測によるストレスの定量化に関する研究、機械的刺激による細胞機能制御のメカニズム解明に関する研究、循環器系疾患の治療支援や病態理解のための循環系シミュレータの開発などに取り組んでいる。
	脇田 政嘉	物理的刺激が生体反応におよぼす影響を調べることにより生体内で行われている反応の解明。特に、物理的刺激として筋肉の収縮、血流による血管の伸縮、腸管のせん動などによって生体を受ける刺激、すなわち伸展刺激に着目している。具体的には、筋芽細胞や心筋に分化する細胞を用い、機械的に発生させた伸展刺激によりこれらの細胞の増殖時および分化時における細胞内反応の変化について研究を行っている。

分野	指導教員	研究分野
理学療法学分野	駒形 英樹	<p>情報工学、特に画像処理技術の医療応用を目的とし、病理画像上の特徴の自動抽出と定量化に関する研究を行っています。これらは病理診断の見落とし防止や客観化などに役立つことが期待されます。また、連続薄切標本を用いた立体的観点からの特徴抽出も研究しています。さらに、対象までの距離を認識する特殊なカメラを使用し、病院等で頻発しているベッドからの転落事故を未然に防ぐためのアルゴリズム等の研究をしています。</p>
	赤坂 清和	<p>筋や関節における痛みや関節可動域制限、筋力低下など筋骨格理学療法、整形外科治療後に行われる整形外科理学療法、スポーツ競技やスポーツ外傷、そして外傷予防に関連したスポーツ理学療法からなる3領域を主な研究領域としている。比較的個人差が少なく健常者を対象に行う基礎研究と臨床の運動機能に関するデータ収集による臨床研究により、理学療法の効果について明らかにしていくことが研究方針である。</p>
	小島 龍平	<p>ヒトを含めた霊長類の姿勢・運動様式の背景となる形態学的特性を明らかにすることを目的として、主として筋線維タイプ構成および筋構築の面から種々の骨格筋群の比較機能形態学的解析を行っている。また、解剖学教育と関連して、ブタ胎仔標本を用いた解剖学実習の構築、ブタ胎仔の肉眼解剖学的な記載、解剖学学習における難しさの構成分析をすすめている。</p>
	高倉 保幸	<p>悪性腫瘍（リンパ浮腫を含む）、脳血管障害、高次脳機能、運動学習、義肢装具、理学療法教育、障害者スポーツなどをテーマにした研究を行っている。実験的研究や基礎的研究よりも、様々な研究手法・統計的手法を駆使し自らの臨床や活動をふり返ることで研究者の臨床・活動能力を向上させる研究方法の習得に力を入れている。</p>
	藤田 博暁	<p>呼吸・循環器疾患を中心とした内部障害理学療法学、ロコモティブシンドローム（運動器症候群）を中心とした予防理学療法に関する研究、動作解析などを基礎的な研究を行っている。近年では、地域在住中高齢者を対象としたフィールドでの研究活動を行っている。</p>
	乙戸 崇寛	<p>筋骨格理学療法及び徒手理学療法の有効性に関する研究を行っている。具体的には、理学療法介入前後の変化を超音波画像や3次元デジタルザーを用いて定量的に評価することにより、これまで経験から得られていた知識や技術について再検証し、更なる理学療法手技の発展に貢献していきたいと考えている。また、徒手による理学療法評価は評価者間の差が大きいと報告されていることから、精度の高い手技を獲得するための教育方法についても研究テーマとして掲げている。</p>

分野	指導教員	研 究 分 野
理学療法学分野	國澤 洋介	<p>脊髄損傷（不全麻痺）患者の歩行能力や基本動作、身体機能の回復に影響する要因の分析と回復に有効な理学療法プログラムの確立を研究テーマとしている。また、がん患者に対する理学療法（予防的、回復的、維持的、緩和的）の安全性や有効性の検証、理学療法士におけるコミュニケーション・スキルの学習法なども研究テーマとしている。</p>
	時田 幸之輔	<p>ヒトを含めた霊長類・脊椎動物の形態学的原則を明らかにすることを目的として、体幹と四肢の境界領域に分布する筋・末梢神経・脈管の局所説明解剖学的検討ならびに、比較解剖学的検討を行っている。</p>

6. 履修の方法

学生は、定められた授業科目から 30 単位以上を履修しなければなりません。

履修登録にあたっては、指導教員と相談の上、授業科目から履修科目を選択し、年度初めの所定期間に「履修届」を提出する必要があります。

7. 大学院設置基準第 14 条による教育方法の特例

近年、大学院における社会人の再教育への要望が高まっておりますが、本学では社会人に対して、昼夜開講制を導入しています。

昼夜開講制とは夜間（18：10～）や特定の時間（時期）に授業・研究指導の時間を設け、病院に勤務する医療職等の社会人が大学院の授業・研究指導をより受けやすくするための制度です。そのため、夜間や土曜日に履修できるカリキュラムを設定し、単位を修得しやすくするなどの配慮を行います。

この制度を利用する者は、指導教員と相談の上、履修科目等を決定します。

また、本学にはサテライトキャンパスがあります。このキャンパスは JR および東武東上線の川越駅から約 200m の位置にあり、修学に便利な場所で授業を受けることができます。

8. 授業時間

区分	時限	授業時間	区分	時限	授業時間
一般の 授業時間	1	9：00～10：30	第 14 条特例 による 授業時間	6	18：10～19：40
	2	10：40～12：10		7	19：50～21：20
	3	13：10～14：40			
	4	14：50～16：20			
	5	16：30～18：00			

9. 長期履修生制度

職業を有する等の事情があり、2 年間の修業年限を超えて計画的に教育課程を履修することを希望する場合には、修業年限を 3 年間とする長期履修生を選択することができます。

この制度を利用する者は、指導教員と相談した上、入学手続きの際に「長期履修生志願書」を提出する必要があります。

10. 学位授与

本専攻に 2 年以上在学し、所定の授業科目について 30 単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、学位論文を提出して、その審査および最終試験に合格することにより修士（医科学）の学位が授与されます。

なお、優れた研究業績をあげた者については、本専攻に 1 年以上在学していれば早期修了も可能です。

11. 奨学金等

日本学生支援機構奨学金：申請し採択された場合は、奨学金の貸与が受けられます。

学 生 募 集 要 項

1. アドミッションポリシー

本専攻ではアドミッションポリシーを基本とし、次のような学生を求めています。

- ① 医学・医療に積極的な関心を持つとともに、ふさわしい倫理観を備え、くわえて他者の意見に耳を傾けることができる人。
- ② 本専攻の教育課程に基づいて学習を重ね、修了に至るために必要な一定以上の基礎的学力を備えており、根気よく学習を継続できる人。
- ③ 論理的に考えを整理し、自分の考えを適格に表現できる人。

2. 募集人員

募集人員 8名（第1回募集 6名、第2回募集 若干名）

（医学研究科医科学専攻は、生体機能科学分野、生体医工学分野及び理学療法分野の3分野で構成されており、各分野の募集人員はそれぞれ若干名とします。）

3. 選抜の区分

入学者選抜には、一般選抜と社会人選抜があります。

一般選抜と社会人選抜とは、試験科目が異なりますので、留意してください。

4. 出願資格

(1) 一般選抜

次のいずれかに該当する者とします。

- ① 学校教育法第83条に定める大学を卒業した者及び平成30年3月までに卒業見込みの者
 - ② 学校教育法第104条第4項の規定により学士の学位を授与された者及び平成30年3月までに授与される見込みのある者
 - ③ 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者及び平成30年3月までに修了見込みの者
 - ④ 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した者及び平成30年3月までに修了見込みの者
 - ⑤ 我が国において、外国の大学の課程(その修了者が当該外国の学校教育における16年の課程を修了したとされるものに限る。)を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した者及び平成30年3月までに修了見込みの者
 - ⑥ 専修学校の専門課程(修業年限が4年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。)で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者及び平成30年3月までに修了見込みの者
 - ⑦ 文部科学大臣の指定した者
 - ⑧ 学校教育法第102条第1項に規定する学士の学位を有する者
 - ⑨ 学校教育法第102条第2項の規定により他の大学の大学院に在学した者であって、本学大学院において、大学院における教育を受けるにふさわしい学力があると認められた者
 - ⑩ 本学大学院において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22歳に達した者
- なお、⑩の入学資格審査の条件は、医療技術の分野で実務経験が5年以上である者

(2) 社会人選抜

社会人選抜において入学を志願する場合は、一般選抜出願資格のいずれかに該当する者で、医療職の免許を有し、入学時点で当該免許にかかわる5年以上の実務経験を有しており、かつ本専攻の趣旨に合致した研究課題を持つとともに、学会発表又は論文作成の実績があるのが望ましく、また意欲的に学ぶ姿勢がある者としします。

5. 出願資格審査について

上記(1)の⑨または⑩で出願しようとする者は、事前に出願資格審査を受けなければなりません。

出願資格審査を希望する者は、あらかじめ、埼玉医科大学保健医療学部大学院担当へ「出願資格審査申請書」を請求し、審査手続をとってください。

出願資格審査は書類審査により行います。出願資格審査を受けて資格が認められた後、一般あるいは社会人の選抜方法を決定して出願してください。

(1) 受付締切日

第1回募集 平成29年 8月 2日(水) 午後4時まで
第2回募集 平成29年 12月 13日(水) 午後4時まで

(2) 提出場所

埼玉医科大学 保健医療学部事務室 大学院担当

(3) 提出書類

次の書類を揃えて申請してください。

① 出願資格審査申請書

※ 本学所定の様式がありますので、お問い合わせください。

※ 外国人の申請様式は別となりますので、ご注意ください。

② 最終学歴に関する証明書

卒業(修了)証明書または卒業(修了)見込証明書、および成績証明書

③ 医療関係の免許証の写し

④ 外国籍の者は、市町村発行の外国人登録済証明書を添付すること。

(4) 審査結果

本人宛に通知します。

(5) 事前面接

出願資格審査申請書を提出する前に、志望する指導教員と予め研究内容等について相談をしてください。(日程調整が必要となりますので、早めに予約をしてください。)

分野の代表者の連絡先は次のとおりです。

分野	代表者	メールアドレス
生体機能科学分野	佐藤 正夫	satoma@saitama-med.ac.jp
生体医工学分野	小林 直樹	naoki_kb@saitama-med.ac.jp
理学療法学分野	赤坂 清和	akasaka@saitama-med.ac.jp

6. 出願手続

(1) 出願受付期間

第1回募集 平成29年8月14日(月)～平成29年8月29日(火)
第2回募集 平成30年1月4日(木)～平成30年1月10日(水)

(2) 出願場所・出願方法

① 出願場所・郵送先

〒350-1241 埼玉県日高市山根 1397-1
埼玉医科大学 保健医療学部事務室 大学院担当 宛

② 出願方法

窓口持参(土、日、祝祭日を除く 午前9時～午後4時まで)もしくは郵送のこと。
郵送の場合は書留速達扱いとし、封筒に「埼玉医科大学大学院入学試験出願書類在中」と朱書きの上、受付期間内必着となります。

(3) 出願書類

次の書類を揃えて出願してください。

① 入学願書・履歴書・志望理由書・受験票(大学用) (募集要項中の様式1～4)

※ 出願資格審査申請書・入学願書・履歴書・受験票(大学用)には、同一写真を貼付すること。(縦4cm×横3cm:3ヶ月以内撮影の上半身脱帽正面背景無地 裏面に氏名記入)

※ 外国籍の者は、市町村発行の外国人登録済証明書を添付すること。

② 最終学歴に関する証明書

卒業(修了)証明書または卒業(修了)見込証明書及び成績証明書

※ 本学保健医療学部卒業(見込)者は不要です。

③ 検定料 30,000円

銀行振込とし、出願には検定料振込済証明書(募集要項中の様式5)を入学願書に貼付すること。振込手数料が発生する場合は志願者本人の負担となります。なお、検定料納入後の返還は一切行いません。

④ 返信用封筒

受験票を郵送で受取希望の場合は、書留速達分(672円)の切手を添え、送付先住所を記入した返信用封筒を準備すること。

※ 出願資格審査申請時に提出済みの書類は不要です。

(4) 事前面接

入学願書を提出する前に、志望する指導教員と予め研究内容等について相談をしてください。(日程調整が必要となりますので、早めに予約をしてください。)

※ 出願資格審査申請時に事前面接済みの者は不要です。

分野の代表者の連絡先は次のとおりです。

分野	代表者	メールアドレス
生体機能科学分野	佐藤 正夫	satoma@saitama-med.ac.jp
生体医工学分野	小林 直樹	naoki_kb@saitama-med.ac.jp
理学療法学分野	赤坂 清和	akasaka@saitama-med.ac.jp

7. 入学者選抜

入学者選抜では、筆記試験、面接試験および出願書類により、総合的に判定します。

(1) 一般選抜

○ 筆記試験

共通試験		英語（辞書の持ち込み可、ただし電子辞書は除く。）
専門科目試験	生体機能科学分野	基礎医学系 4 科目（生化学、生理学、解剖学、病理学）、臨床検査系 4 科目（臨床生理学、臨床化学、臨床病理学、臨床免疫学）、ゲノム医学系 2 科目（ゲノム科学(遺伝学)、発生学) の計 10 科目の中から 3 科目を選択
	生体医工学分野	数学 2 科目（線形代数、微分積分）、臨床医学 2 科目（医学概論、臨床医学総論）、工学基礎 3 科目（電気電子工学、情報工学、機械工学）、臨床工学 3 科目（医用材料、人工臓器、医用安全管理学）の計 10 科目の中から 3 科目を選択
	理学療法学分野	専門基礎分野 4 科目（筋骨格機能形態学、中枢神経機能形態学、心肺機能形態学、運動学）、専門分野 4 科目（筋骨格理学療法、神経理学療法、心肺理学療法、高齢者理学療法）の計 8 科目の中から 3 科目を選択

○ 面接試験

(2) 社会人選抜

○ 筆記試験

英語	英語（辞書の持ち込み可、ただし電子辞書は除く。）
小論文	各分野の専門領域に関連する小論文

○ 面接試験

(3) 試験日時

第 1 回募集 平成 29 年 9 月 2 日（土） 9 時 30 分～15 時

第 2 回募集 平成 30 年 1 月 13 日（土） 9 時 30 分～15 時

(4) 試験時間割

試験科目	専門科目試験・小論文	英語	面接
試験時間	9：30～11：00	11：20～12：20	13：30～

(5) 試験会場

埼玉医科大学 日高キャンパス 保健医療学部棟

8. 受験にあたっての注意事項

- ① 出願書類等に不備がある場合、受理しないことがあります。
- ② 出願書類受付後の書類の変更は認めません。また一旦受理した出願書類は返還できません。
- ③ 受験票は必ず持参してください。
- ④ 試験開始の 30 分前（午前 9 時）までには、試験会場に到着してください。
- ⑤ 提出書類の記載事項と事実が相違していることが判明した場合には、入学決定後であっても入学を取り消す場合があります。

9. 合格発表

- 第1回募集 平成29年9月15日(金) 午後4時
第2回募集 平成30年1月26日(金) 午後4時

本学日高キャンパスの保健医療学部事務室前に掲示するとともに、本人宛に通知します。

なお、本学大学院ホームページでも閲覧できます。URL <http://www.saitama-med.ac.jp>

※ 掲示発表を正式とします。

10. 入学手続き

- 第1回募集 平成29年9月19日(火)～平成29年10月10日(火)
第2回募集 平成30年2月5日(月)～平成30年2月16日(金)

合格者には、「合格通知」と「入学手続き書類」を願書に記載された現住所に送付しますので、手続き期間中に入学手続きを完了してください。

期日までに所定の手続きを完了しない場合は、入学を辞退したものと扱います。

11. 学納金

平成30年度入学者の学費は以下のとおりです。

区 分	金 額
入学金	300,000 円
授業料 (年額)	700,000 円
施設設備費 (年額)	200,000 円
障害保険及び賠償責任保険 (通常履修の2年分)	2,790 円
合 計	1,202,790 円

注1. 授業料については、前期と後期に分けて分納ができます。

分納を希望する者は、入学手続きの際、「学納(授業料等)分割願」を提出する必要があります。

ただし、長期履修生の授業料分納はできません。

2. 長期履修生の学費は、入学金以外の学費について標準修業年限2年分を、認められた履修期間の年数で除した額(1万円未満は1万円に切り上げ)とします。

例えば、履修期間が3年の場合は、次のとおりとなります。

入学金	300,000 円
授業料 (年額)	470,000 円
施設設備費 (年額)	140,000 円
障害保険及び賠償責任保険 (通常履修の3年分)	4,150 円
合 計	914,150 円

3. 入学手続き完了後の入学辞退は、申し出により平成30年3月31日(土)午後5時までに所定の手続きを終了した場合、入学金以外を返還します。

12. 個人情報の取扱いについて

出願および入学願書等に記載された個人情報は、入学者選抜の実施、合格発表、入学手続き、入学後の履修、学籍関係および学生生活に必要な業務を行なうために使用します。

本学が取得した個人情報は、法律で定められたとおり適切な管理を行います。

お問い合わせ先

〒350-1241 埼玉県日高市山根 1397-1

埼玉医科大学 保健医療学部事務室 大学院担当

TEL : 042-984-4801 Fax : 042-984-4804

メールアドレス hokeniryou@saitama-med.ac.jp